

資料編

1 東海村の生物多様性の現状と課題

本村における生物多様性の現状と課題を，東海村生物多様性地域戦略策定委員会の委員からの意見をもとに，環境タイプごとに整理しました。

(1) 海浜



【現状】

久慈川河口一帯，海岸線の砂浜などの海浜には，かつては，ハマエンドウやハマヒルガオなどの海浜植物が群生する，茨城県の海岸を代表する景観がありました。現在は，開発や砂浜への車両進入などにより改変が進み，ハマエンドウ，ハマヒルガオ，ハマカキラン，ネコノシタ，ケカモノハシ，シロヨモギ，ハマニンニク，ビロードテンツキなどが部分的に見られる程度です。また，イヨカズラ，ナミキソウ，ハマハタザオの生育は認められず，本村から消えてしまったと考えられます。村の食文化を構成する食材でもあったハマボウフウ（はまざく）も，ほとんど見られません。村の花であるスカシユリは，現在，原子力関連施設の敷地内に分布がほぼ限られています。オオウメガサソウは，茨城県では，ひたちなか市と本村の一部で生育が確認されているのみで，その他国内では青森県と北海道の一部でしか確認されていない希少な植物です。海浜地域は，カワラハンミョウ，ニッポンハナダカバチなどの貴重な昆虫の生息地ともなっています。

【課題】

豊岡及び村松の海岸一帯は，県の自然環境保全地域に指定されています。今後も，県や原子力関連事業者などと連携・協力し，海浜の生物多様性の保全・再生に向けた取組みを進めていくことが必要です。

また，優れた自然と村民がふれあうことができる場所が限定されていることから，村民が一定の関わりを持ち，海浜の自然の重要性を改めて認識し，また，親近感を育むことが求められています。

(2) 河川

1) 久慈川



【現状】

久慈川は、八溝山を源流として茨城県や福島県を流れ、山田川や里川などの支流と合流して太平洋に至る茨城県を代表する河川です。

河口から 5km ほどまでの河口域は、潮の干満の影響を受ける汽水域となっています。川と海とをサケやアユなどが往復し、海産魚のいくつかが混じります。河岸に発達するヨシ群落では、南方からの渡り鳥の姿が初夏から見受けられ、土堤や河川敷の樹林にはサギ類のコロニーも見られます。砂洲などには、旅鳥のシギ類の姿が多く、最下流の砂礫地には、冬期ウミネコなどが群れる風景が見られます。河口域には、汽水に生息するスズキ、ボラ、クロダイをはじめカニ類や貝類の小型種も多く、季節ごとに生物種の変化が見られます。秋は、南へ渡るツバメが群れ舞う地となっています。

久慈川では、久慈川漁業協同組合により内水面漁業が営まれています。本村の竹瓦地先では貴重なカワノリを今も採ることができます。

【課題】

このような自然が残されている一方、河川敷を見るとアレチウリ（特定外来生物）、セイタカアワダチソウ（要注意外来生物^{※用語}）、オオオナモミ（要注意外来生物）などの外来生物が増えています。

また、都市下水が久慈川に流入しており、公共下水道の整備促進とともに公共下水道認可区域以外の地区の合併浄化槽の整備が求められています。

久慈川を、村民がより身近にふれあえる空間にしていけるため、河川環境の保全・再生に向けて、流域自治体をはじめ関係機関と連携・協働しつつ検討していく必要があります。

2) 新川



【現状】

夏期には海からボラ、スズキ、マハゼなど、淡水と海水が混じり合った汽水域を好む魚が川を上ってきます。寒冷期には、近年サケが遡上し産卵します。

また、日本の暖水域に生息するカワアナゴは、新川が北限の記録となっています。その他、カジカ、メダカなど今では貴重種となった魚類も生息しています。県内において限られた生息地を持つコウガイモも大群落をつくっています。

【課題】

このような自然が残されている一方、須和間から村松にかけての新川の両岸は、コンクリートで護岸され、水門などの人工構造物による弊害も見られ、今後工夫していく必要があります。

エビモ、ホザキノフサモなどが生育しているものの、以前に比べ減少しています。環境省より要注意外来生物に指定されているオオカナダモが増加傾向にあります。

（３） 水田，農業水路，ため池及びその周辺（低地）

１）水田（休耕田を含む）



【現状】

水田に生える水草は，除草剤の使用で減少していますが，まだ多くの水草が見られます。そのなかには，国や県のレベルでも希少で絶滅が危惧されるミズニラ，ミズワラビ，サンショウモ，オオアカウキクサ，ヒメミソハギ，ウスゲ，チョウジタデ，マルバノサトウガラシ，ミズマツバなどが含まれます。一部の休耕田にも絶滅が危惧される種が認められます。

アカハライモリは，谷津田の湧水が豊富な場所などで農薬があまり撒かれないう水田に生息しています。

近年，こうした水田の持つ生物多様性の保全機能が注目をされています。

【課題】

農業従事者の高齢化や後継者不足，谷津田はそもそも耕作が困難であることなどを背景に，休耕田が増え，水田が持つ生物多様性保全機能の維持が困難となっています。

また，神楽沢（村松）の道路建設と平原（村松）の処分場建設などの開発により，消失したところもあります。

冬水田んぼは，生物生息空間を確保する手法として有効ですが，用水の確保や維持管理費の負担などが課題となっています。

耕作放棄地については，飼料米の作付け，場所によっては自然再生に向けた検討が必要になっています。

2) 農業水路



【現状】

豊岡では、水草のコウホネやナガエミクリの点在が確認されています。

石神外宿の前谷付近に見られたヒルムシロ、カンガレイ、石神外宿の八反田から竹瓦の前川にかけてのナガエミクリは激減してしまいましたが、新たに那珂市本米崎と接する石神外宿の用水路でミクリとともに確認されています。村内最大の群生地であり、生息地の保全対策が必要とされています。

村内各地に、このような水草の群生地があることは水環境の豊かさが残っていることのあらわれといえます。

【課題】

草刈りなどの手入れが行われないところで、外来植物が増加しているところがあり、そうした場所については、保全管理活動を推進する必要があります。

これまでの農業水路の整備は、生物多様性への配慮が必ずしも十分ではなく、川と用水路の合流部の段差の解消を図るなど、生物多様性へのより一層の配慮が求められています。

3) ため池



【現状】

本村には阿漕ヶ浦，内宿溜，前谷溜，押延溜など7つのため池があります。最も大きい池は，村松の阿漕ヶ浦です。この池には，水面に植栽されたハスが広がり，水際にはマコモが見られます。また，砂地にはハマヒルガオ，コウボウシバなどの海浜植物が生育しています。かつてはヨシに混じってジョウロウスゲが群生していましたが，現在は見られません。

石神内宿の内宿溜は，周囲は改修されてコンクリートの護岸が目立ちます。水面には，浮葉植物のヒシが見られます。周囲の樹林ではショウジョウバカマ，ゼンテイカ，カラタチバナ，アケボノソウなど村内では貴重な植物が生育しています。

石神外宿の前谷溜では，池の周囲にオニスゲ，カンガレイ，ウキヤガラ，マコモ，アケボノソウ，ショウブなど湿地性の植物が豊富に生育していましたが，一部埋め立てられた所もあり環境が変化しています。

【課題】

村内のため池には，まだ多くの水生植物が見られます。しかし，環境の改変などにより，見られなくなった種類もあります。

また，オオクチバス（特定外来生物）などが放流され釣堀化しているところもあります。ため池ごとの状況に応じた保全策が必要となっています。

（４） 樹林（低地・斜面・台地）、湿った崖、湧水地

東海村緑地保全計画書策定時（平成 12 年）の樹林地面積は 585.36ha で、樹林緑被率は 16.0%（行政面積 3,667ha）でした。平成 20 年の樹林地面積は 537.01ha で、樹林緑被率は 14.3%（行政面積 3,748ha）です。このように、村内では、樹林がこの 10 年程度の間にも、大幅に減少しています。

樹林には、地下水の保全をはじめ様々な機能があります。市街地を取り囲む斜面林や平地林は、多くの村民が生活する都市環境を保持する観点から特に重要です。里山の保全に向けて「村民の森」指定による報償金制度が平成 20 年度から始まっています。里山の維持管理は今後も継続して検討する必要があります。

樹林地の分布は、低地、斜面、台地の主に 3 エリアに区分することができます。各エリアの樹林の現状と課題は次のとおりです。

1) 低地の樹林



【現状】

国道 245 号線から東側の原子力関連施設などでは、クロマツ植林が広がっています。国道 245 号線より西側では、樹林は久慈川低地の一部に社寺林、屋敷林として残っている程度です。

本村本来の森の様子（潜在自然植生）は、村松山虚空蔵堂周辺で見ることができます。タブノキ林、スダジイ林、シラカシ林といった、いずれも照葉樹林です。タブノキやスダジイは、村内では屋敷林として残っている所もあります。新川沿いの照沼には、モミ、コナラ、アカガシ、スダジイなどが混ざったシラカシ林が見られます。

【課題】

村内にわずかにしか見られないこれらの自然の森については、厳正に保全していくことが求められます。

2) 斜面の樹林（斜面林）



【現状】

村内には斜面の樹林（斜面林）が多方面に連続しています。植生としては、スギなどの植林が多く、場所により本村の自然植生の遷移系列にあたる、アカマツ群落、クヌギやコナラの二次林と、一部にヤブコウジースダジイ林が見られます。

石神外宿から石神内宿にかけての北側斜面にはアカガシ、シロダモ、タブノキ、ヤブツバキなどが混生する常緑広葉樹林が見られます。豊岡の北側斜面にはタブノキ林が見られます。村松（押延）にはコナラ林が見られます。コナラやクヌギなどの二次林は人との関わりが深く、堆肥などに利用されてきました。

また、新緑、紅葉など四季の変化が感じとられる林として親しまれています。

【課題】

植生としてはスギなどの植林が多く、また、現在は手入れが滞り、アズマネザサが優占していたり、モウソウチクやマダケの竹林が拡大していたりするなど、他の植物が生育できない状態になっているところが多くあります。

斜面林は、開発などによって失われると化石床となっているシルト層の岩盤が露出し、なんらかの防災対策をとらないと土砂の崩壊を生じる可能性があります。防災の観点からも保全、また場所によっては土砂崩壊の防備にたけた自然林へ誘導することなどが望まれます。

3) 台地の樹林



【現状】

台地に見られる樹林は、植生としては、主にスギ・ヒノキの植林で、一部にクヌギやコナラの二次林が見られます。

【課題】

台地に見られる樹林は、身近な自然として保全の重要性が増す一方、開発、管理放棄などにより、面積の減少・質の低下に、歯止めがかかっていません。

人が多く住む市街地内、また市街地周辺に広がる樹林は、良好な住環境の保全という観点からも非常に重要です。

4) 湿った崖



【現状】

村松の川根に代表される湿った崖が，村内各所に見られます。水田脇の湿った斜面には，モウセンゴケなど多くの貴重な植物が見られます。

押延溜から天神山に向けた丘陵末端部には湿った崖地，その周辺には水量の安定した低湿地，それに続き水田が広がっています。

湿った崖斜面ではムカシヤンマや貝類のキセルガイのなかまなどが，低層湿原にはモウセンゴケ，タコノアシなどの湿性植物が見られます。

【課題】

本村の湿った崖地には，このように貴重な野生生物が見られ，周囲の環境を含めて保全していく必要があります。

5) 湧水地



【現状】

本村には湧水地が点在しています。

南台団地北側斜面の湧水水路では，多数のゲンジボタルが見られます。新川沿いの斜面林湧水域にはトウキョウサンショウウオが見られます。また，湧水を伴う小湿地にはオゼイトトンボが生息しています。

【課題】

湧水は本村の生物多様性を保全するうえで重要な要素である一方，かつて湧水が出ていた場所で，現在は環境が悪化しているところもあります。

湧水は平成 23 年 3 月の東日本大震災時に，願船寺の湧水などが人の生活用水としても利用されました。防災の観点からも保全が望まれます。

(5) 畑（台地）



【現状】

本村はさつまいもが名産です。そうした中で、春の強風の時期が作付けの準備時期と重なるため、土埃（土壌の風食）が多く発生しています。また、土壌消毒による生産基盤としての土壌の地力への影響も、持続可能な農業の振興という観点から懸念されます。

【課題】

土壌は、農業を行う上でとても大切なものであり、持続可能な利用に向けて保全対策が必要となっています。

(6) 市街地

図表 13 都市公園等整備事業（平成 25 年 3 月現在）

区分	箇所数	面積(m ²)
都市公園	14	288,460
その他公園	60	104,637
緑地	8	147,654
計	82	540,751

資料：都市政策課

【現状】

本村では市街地における街区公園や近隣公園など、身近に利用できる公園の整備を進めています。

これまで植栽にあたっては、病虫害に対する抵抗性、周辺住民への落葉の問題への配慮、見栄え、入手しやすさなどの理由から、外来種や園芸品種の苗木を選定することが少なくありませんでした。

また、事業所や一般家庭においては、生物多様性の観点を踏まえた緑化のあり方が浸透していないのが現状です。

【課題】

生物多様性を保全・再生していくという観点から、植栽種に地域性種苗を選択することの大切さを普及するとともに、行政として地域性種苗の利用を具体的に促進する仕組みをつくる必要があります。

2 自然の健全さを示す主な種の解説

(1) 植物

・種名・科名は，東海村教育委員会『東海村の自然誌』（平成 19 年），国土交通省「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（平成 24 年度生物リスト）」などによった。

※希少性

国：○は環境省レッドリスト（平成 24 年）掲載種

県：○は茨城県レッドリスト（平成 24 年）掲載種

村：○は東海村レッドリスト（平成 19 年）掲載種

アケビ（アケビ科）



ツル植物（花期 4～5 月）

生育環境 日当たりのよい樹林

希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

イロハモミジ（カエデ科）



落葉高木（花期 4～5 月）

生育環境 樹林

希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

オオウメガサソウ（イチヤクソウ科）



草本（花期 6 月）

生育環境 海岸近くの樹林内

希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

カザグルマ（キンポウゲ科）



草本（花期 5～6 月）

生育環境 湿地などの湿り気の多い場所

希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

コナラ（ブナ科）



落葉高木（花期 4～5 月）
 生育環境 日当たりのよい樹林
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

シラカシ（ブナ科）



常緑高木（花期 10～11 月）
 生育環境 樹林
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

シロダモ（クスノキ科）



常緑高木（花期 10～11 月）
 生育環境 樹林
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

スカシユリ（ユリ科）



草本（花期 7～8 月）
 生育環境 海浜（砂地）や崖地などの日向
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：○

スタジイ（ブナ科）



常緑高木（花期 5～6 月）
 生育環境 半日陰～日陰の樹林
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ナガエミクリ（ミクリ科）



草本（花期 6～9 月）
 生育環境 水がきれいな水路や谷津など
 希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

ハマカキラン（ラン科）



草本（花期 7～8 月）
生育環境 海岸近くの樹林
希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

ハマナス（バラ科）



草本（花期 5～8 月）
生育環境 海浜
希少性※ 国：－ 県：○ 村：－

ミズニラ（ミズニラ科）



草本（花期は不定期）
生育環境 谷津などの湿った場所
希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

ムラサキシキブ（クマツツラ科）



落葉低木（花期 6～8 月）
生育環境 日当たりのよい樹林
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

モウセンゴケ（モウセンゴケ科）



草本（花期 7～8 月）※食虫植物
生育環境 谷津などの湿った日向
希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

ヤブコウジ（ヤブコウジ科）



常緑小低木（花期 7～8 月）
生育環境 樹林内の日陰
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ヤブツバキ (ツバキ科)



常緑高木 (花期 2～4 月)

生育環境 樹林

希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ヤブラン (ユリ科)



草本 (花期 8～10 月)

生育環境 樹林内の日陰

希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ヤマザクラ (バラ科)



落葉高木 (花期 4 月)

生育環境 樹林

希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

(2) 動物

・種名・科名は、東海村教育委員会『東海村の自然誌』（平成 19 年）、環境庁（現・環境省）編『日本産野生生物目録』の脊椎動物編（平成 5 年）と無脊椎動物編Ⅱ（平成 7 年）、国土交通省「河川水辺の国勢調査ための生物リスト（平成 24 年度生物リスト）」などによった。

※希少性

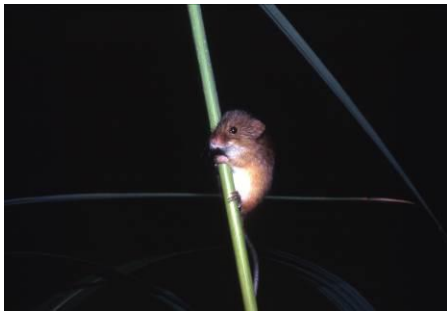
国：○は環境省レッドリスト（平成 24 年。汽水・淡水魚類は平成 25 年）掲載種

県：○は茨城県レッドリスト（平成 24 年）掲載種

村：○は東海村レッドリスト（平成 19 年）掲載種

1) 哺乳類

カヤネズミ（ネズミ科）



大きさ 5～8cm
生息環境 ススキやチガヤなどの草地
希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

ニホンリス（リス科）



大きさ 18～22cm
生息環境 樹林
希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

2) 鳥類

アオサギ（サギ科）



大きさ 約 93cm
生息環境 河川、湿地、水田など
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

アオバズク（フクロウ科）



大きさ 約 50cm
生息環境 樹林 ※夏期に繁殖のみ
希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

アカゲラ（キツツキ科）



大きさ 約 25cm
生息環境 樹林
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

オオタカ（タカ科）



大きさ 雄 50cm, 雌 58cm
生息環境 樹林
希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

オオハクチョウ（カモ科）



大きさ 約 140cm
生息環境 水面が広い池沼など ※越冬
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

カワセミ（カワセミ科）



大きさ 約 17cm
生息環境 池沼など
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

カンムリカイツブリ（カイツブリ科）



大きさ 約 56cm
生息環境 河川など ※越冬
希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

コハクチョウ（カモ科）



大きさ 約 120cm
生息環境 水面が広い池沼など ※越冬
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ダイサギ (サギ科)



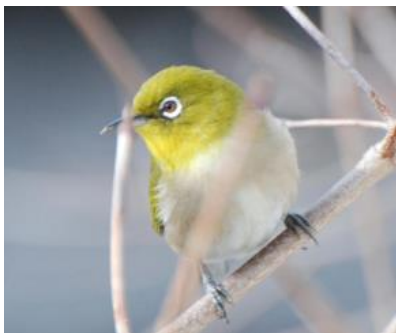
大きさ 約 90cm
生息環境 河川, 湿地, 水田など
希少性※ 国: — 県: — 村: —

バン (クイナ科)



大きさ 約 33cm
生息環境 池沼など
希少性※ 国: — 県: — 村: —

メジロ (メジロ科)



大きさ 約 12cm
生息環境 広葉樹林
希少性※ 国: — 県: — 村: —

3) 両生類

トウキョウサンショウウオ (サンショウウオ科)



大きさ 約 8~15cm
生息環境 湿った樹林, 湿地など
希少性※ 国: ○ 県: ○ 村: ○

4) 魚類

アユ (アユ科)



大きさ 約 20cm
生息環境 河川 ※回遊
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

カジカ (カジカ科)



大きさ 約 15～17cm
生息環境 水質の良い河川
希少性※ 国：○ 県：－ 村：－

カワアナゴ (ハゼ科)



大きさ 約 25cm
生息環境 河川
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ギバチ (ギギ科)



大きさ 約 12～25cm
生息環境 比較的水質の良い河川
希少性※ 国：○ 県：－ 村：－

サケ (シロザケ) (サケ科)



大きさ 約 65cm
生息環境 河川 ※回遊
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ウナギ (ウナギ科)



大きさ 約 40～50cm
生息環境 水路など ※回遊
希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

メダカ（メダカ科）



大きさ 雄約 4cm, 雌約 5cm
 生息環境 小川, 水田など
 希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

5) 昆虫類

アオヤンマ（ヤンマ科）



大きさ 約 5cm
 生息環境 湿地など
 希少性※ 国：○ 県：— 村：—

オオムラサキ（タテハチョウ科）



大きさ 約 4.3~6.8cm
 生息環境 広葉樹林
 希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

オゼイトトンボ（イトトンボ科）



大きさ 約 2.5~3.0cm
 生息環境 湿地など
 希少性※ 国：— 県：○ 村：○

カブトムシ（コガネムシ科）



大きさ 約 3.2~5.3cm
 生息環境 広葉樹林
 希少性※ 国：— 県：— 村：—

ギンイチモンジセセリ（セセリチョウ科）



大きさ 約 1.7～1.8cm
 生息環境 ススキなどのイネ科の草地
 希少性※ 国：○ 県：－ 村：－

ゲンジボタル（ホタル科）



大きさ 約 1.2～1.8cm
 生息環境 水のきれいな小川や水路など
 希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

コオイムシ（コオイムシ科）



大きさ 約 1.7～2.2cm
 生息環境 ため池，池沼，水田など
 希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

ニッポンハナダカバチ（アナバチ科）



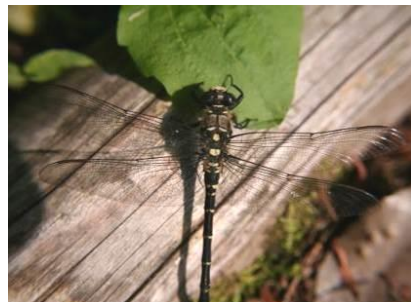
大きさ 約 2～2.3cm
 生息環境 海岸，河川敷の砂地
 希少性※ 国：○ 県：○ 村：○

ハイケボタル（ホタル科）



大きさ 約 0.7～1cm
 生息環境 湿地，水田など
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ムカシヤンマ（ムカシヤンマ科）



大きさ 約 8cm
 生息環境 湧水のある崖など
 希少性※ 国：－ 県：－ 村：－

ヤマトタマムシ（タマムシ科）



大きさ 約 3～4cm

生息環境 広葉樹林

希少性※ 国：－ 県：○ 村：○

3 用語解説

【あ行】

- ・インフラストラクチャー：

生活や産業の基盤として整備される施設や仕組みのこと。

- ・E S D（持続可能な開発のための教育）：

ユネスコ（国連教育科学文化機関）を主導機関として国際的にその推進が求められる教育。地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取組み、持続可能な社会づくりの担い手となるように人々を育成し、意識と行動を変革することを目的とする教育のこと。

- ・エコツーリズム：

地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全が進むとともに、地域活性化につながっていくことを目指す仕組みのこと。

【か行】

- ・学校・園庭ビオトープ：

学校や保育所、幼稚園の敷地内に設置された草地や池、樹林などの野生生物が生息・生育する空間のこと。地域性種苗の利用が基本となる。子どもたちの最も身近な自然体験の場となる。

- ・現存自然植生：

現在、その土地に成立している自然の植物のまとまりのこと。

- ・コンパクトなまちづくり：

日々の暮らしに必要な施設や機能が身近に整った、高齢者をはじめとした多くの人が暮らしやすいまちづくりの考え方。

【さ行】

- ・侵略的外来種：

外来種の中で、地域の自然環境に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれのあるものを、特に侵略的外来種という。例えば、オオクチバスやブルーギルは、在来水生動物を大量に捕食し、それらが放されたため池などで、在来魚の種数の減少、個体数の減少を招くことが知られている。

・生物多様性：

様々な野生生物が存在していることを指す言葉。野生生物は40億年という長い歴史の中で、様々な環境に適応して進化し、その結果、現在、地球上には3,000万種ともいわれる多様な野生生物が存在していると言われている。これらの野生生物は一つひとつに個性があり、全て直接的、間接的に支えあって生きている。

生物多様性条約では、①生態系の多様性、②種の多様性、③種内(遺伝子)の多様性という3つのレベルで多様性があるとしている。具体的に、①生態系の多様性とは森林、里地里山、河川、湿原、干潟、サンゴ礁など様々なタイプの自然があることを、②種の多様性とは動植物から細菌などの微生物にいたるまで、様々な野生生物がいること、③種内(遺伝子)の多様性とは同じ種でも異なる遺伝子を持つことにより、形や模様、生態などに多様な個性があることを指す。

国際社会では、地域の気候風土にあった生物多様性を保全・再生することが求められている。

・潜在自然植生：

人為的な干渉がなかった場合に、その場所の気候風土により最終的に成立する植物のまとまりのこと。

【た行】

・ため池：

本戦略では、農業用水を確保するために水を貯え取水ができるよう、人工的に造成された池のほか、自然に形成された池を含めて「ため池」とした。

・地域性種苗：

地域の自然に本来生える植物をもとに生産された種苗を指す。その地域に自生する植物と同じ種であっても、例えば遠方を産地とするものは生物多様性の喪失につながるため含まない。日本緑化工学会「生物多様性保全のための緑化植物の取り扱い方に関する提言」(平成14年)、亀山章(監修)・小林達明・倉本宣(編)『生物多様性緑化ハンドブック』(平成18年、地人書館)にもとづく考え。

・特定外来生物：

外来生物のうち、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものについて「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(略称:外来生物法)」により指定された生物。飼育、栽培、保管及び運搬、また、野外へ放したり、植えたりすることが禁止されている。オオクチバス、ウシガエル、オオキンケイギク、アライグマなどが該当する。

【な行】

・ノー・ネット・ロス：

開発事業後も自然環境の損失がないこと。開発事業に際して、①希少な動植物の生息・生育地に対する影響の回避・低減を基本としたうえで、②やむを得ず失われる自然環境に対して、失われる自然環境と同等の自然環境を他所で再生して埋め合わせなどを行うことによって実現する。

【は行】

・ビオトープ／ビオトープ・ネットワーク：

地域の野生生物がくらす空間のこと。樹林や草地、水辺など様々な種類がある。地域の自然に本来見られるビオトープを保全し、縮小したり、失われたビオトープを再生させ、さらに、野生生物がその間を移動できるようにビオトープ間をネットワークさせるまちづくりが求められている。ビオトープ・ネットワークについては、エコロジカル・ネットワーク、生態系ネットワークとも呼ばれる。

【ま行】

・メダカ：

「メダカ」については、近年の研究により、北日本集団（キタノメダカ）と南日本集団（ミナミメダカ）の2種に分類され、さらに地域ごとにいくつもの細かい集団に分かれていることが分かってきている。東海村は、ミナミメダカの分布域に含まれる。

【や行】

・谷津：

台地に谷が入り込む独特の地形のこと。その細長い低湿地部は、昔から水田として利用されてきた。

・ヤブツバキクラス域：

日本の植生は、自然植生の構成種の名をとって、高山帯域（高山草原とハイマツ帯）、コケモートウヒクラス域（亜高山針葉樹林域）、ブナクラス域（落葉広葉樹林域）、ヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林域）の各クラス域に大別されている。この「クラス域」とは、広域に分布し景観を特徴づけている自然植生によって植物社会学的に定義されたもので、主要なクラスの生育域のことを指している。ヤブツバキクラス域は、関東以西の標高700～800m以下で発達し、北にいくほど高度を下げ、東北地方北部では海岸寄りに北上している。

・要注意外来生物：

外来生物法により飼養などの規制が課されるものではないものの、生態系など

に悪影響を及ぼしうることから，環境省より，適切な取扱いが呼びかけられているもの。アメリカザリガニやキシノウズ，ホテイアオイなどが該当する。

4 名簿

(1) 東海村生物多様性地域戦略策定委員会（平成 24・25 年度）

氏 名	所属など	備 考
石川 久男	東海村商工会	
大宮 祐美子	村民（一般公募）	
荻沼 正和	茨城県植物園インタープリター	
梶川 直樹	茨城県環境アドバイザー	
加藤木 賢	とうかい環境村民会議 自然共生社会部会部会長	
上条 八洲江	とうかい環境村民会議 低炭素社会部会	
川崎 志保	とうかい環境村民会議 自然共生社会部会副部会長	
川島 省二	一般社団法人 茨城県環境管理協会	委員長
桐原 幸一	東海村環境審議会 元茨城県立東海高等学校長	副委員長
西郷 いづみ	村民（一般公募）	
茂又 遼史	とうかい環境村民会議 自然共生社会部会副部会長	
砂押 洋美	元農業委員	
富田 文子	とうかい環境村民会議 循環型社会部会	
中村 恵美子	東海村環境審議会 茨城県環境アドバイザー	
萩谷 清貴	ひたちなか農業協同組合 ひたちなか東海支店	
広瀬 敦子	東海村環境審議会 こどもエコクラブ	
廣瀬 誠	元東海村動植物生態系調査検討委員会 環境省希少野生動植物種保存推進員	
山本 英明	元とうかい環境村民会議 生活環境部会副部会長	24 年度



(2) 東海村生物多様性地域戦略庁内検討委員会（平成 24・25 年度）

所 属		氏 名	備 考
総合政策部	政策推進課	池田 洋平	副委員長
	まちづくり国際化推進課	河野 通則	
福 祉 部	介護福祉課	前田 英樹	25 年度
経済環境部	経済課	伊藤 広顕	24 年度
	経済課	橋本 良行	25 年度
	環境政策課	永山 弘明	
	消防防災課	岡部 聡	25 年度
建設水道部	都市政策課	菊池 敬	委員長
	みちづくり課	萩谷 孝之	
	区画整理課	鈴木 廣光	24 年度
	区画整理課	坪 秀章	25 年度
	下水道課	笹嶋 士郎	
教育委員会	学校教育課	橋本 良行	24 年度
	教育委員会指導室	菊地 義光	25 年度
	生涯学習課	林 恵子	



5 写真提供

頁	写 真	提供者
P15, 68	カヤネズミ	(公財) 日本生態系協会
P19, 69	オオタカ	須田 秋夫 氏 (東海村の自然と文化財を守る会)
P26	レッドリスト	東海村の自然誌 (東海村教育委員会)
P33	村松小学校ビオトープ	東海村立村松小学校
P37	東海ファーマーズマーケット	農業支援センター
P38	「東海村の新しい『顔』づくり」 プロジェクトの様子	東海村観光協会
P40	村松山虚空蔵堂	村松山虚空蔵堂
P40	大神宮	大神宮
P64	イロハモミジ	(公財) 日本生態系協会
P66	ヤブコウジ	(公財) 日本生態系協会
P68	ニホンリス	(公財) 日本生態系協会
P69	アカゲラ	(公財) 日本生態系協会
P69	オオハクチョウ	(公財) 日本生態系協会
P69	カワセミ	(公財) 日本生態系協会
P69	カンムリカイツブリ	(公財) 日本生態系協会
P69	コハクチョウ	(公財) 日本生態系協会
P71	ウナギ	(公財) 日本生態系協会

東海村生物多様性地域戦略
－ 自然の恵みが持続するまちづくりに向けて －

平成 26 年 3 月

発行：東海村

〒319-1192 東海村東海三丁目 7 番 1 号

電話 029-282-1711（代表）

協力：公益財団法人 日本生態系協会